

思春期の性成熟に伴う自己意識の構造化の検討

富岡美佳 横手芳恵*

要旨 本研究は、思春期の性成熟に伴う自己意識の測定尺度を開発するため、第一段階としてその因子構造を明らかにすることを目的とした。調査対象はA県内2校の中学生1～3年の男女145名とした。「性成熟に伴う自己意識」の質問項目は、質的研究から生成したサブカテゴリーと先行研究を参考に39項目を設定した。回答が得られた143名（回収率98.6%）のうち、必要な項目に欠損値のない106名を解析対象とした。より少ない項目で適切に測定可能な尺度の開発をねらいとし、内容的妥当性の検討等を行い項目の圧縮を試みた。選定された4因子21項目からなる自己意識の因子構造モデルのデータへの適合度を検証的因子分析にて検討した。結果、思春期の性成熟に伴う自己意識は「身体感覚の自己意識」「性に関する自己意識」「他者（同世代）に向かう自己意識」「他者（大人世代）に向かう自己意識」の4つの下位領域で構成されていることが明らかとなった。

キーワード：思春期 性成熟 自己意識 検証的因子分析 構成概念妥当性

I. はじめに

思春期の身体発育は成熟加速の傾向にあり、それに伴い二次性徴を小学校4年生頃から経験する児童が増加している¹⁻²⁾。本来、この学齢期はエリクソンによると性的には比較的穏やかな発達段階を示し、潜伏期としてゆっくりと社会に向けた心の準備をする時期とされている³⁾。しかしながら、現代は成熟の前傾化とともに性意識・性行動の低年齢化によって、性感染症や妊娠などの問題が生じており、性の健康教育の必要性が指摘されている⁴⁻⁵⁾。また、雑誌やインターネットによる性情報の氾濫や出会い系サイトなどの性被害も深刻な問題となってきている⁶⁻⁸⁾。文部科学省によると学校における性教育の目標は、「人格の完成と豊かな人間形成を究極の目的とする」と示されている⁹⁾。人間形成である性教育においては、性の発達課題と指導の内容を十分に考慮したプログラムを実践することが望ましいとされている¹⁰⁾。以上のことから性教育においては、思春期の性成熟に伴う自己に向けられた意識とその体験世界を理解した上で、十分な時間と丁寧な性教育のあ

りかたが求められる。しかしながら、思春期の自己意識に関する研究蓄積は少なく、その構造については十分に検討されていないのが現状である。このような背景から、筆者らは思春期の性成熟と自己意識のありようについて39名を対象にインタビューを行った。その結果〔膨らむ性意識の繊細さ〕をコアカテゴリーとする9カテゴリー、41サブカテゴリーにより構成される思春期の性成熟と自己意識の様相を明らかにした¹¹⁾。

本研究では、思春期における性教育の教育法の開発を行う研究の一環として、その、教育効果を測定する尺度の開発をねらいに、前述の質的記述的研究から得られた知見をもとに自己意識の構造を量的に検証することとした。

II. 用語の定義

本研究における思春期は、ピアジェが示した、自己の性成熟を対象として認識できる形式的操作期にあたる12歳からとし¹²⁾、「二次性徴が現れてからの12歳前後から17歳前後までの時期¹³⁾」とした。ま

た、自己意識については梶田の定義を参照し、「自己に向けられた意識で、評価・感情で彩られた内的世界¹³⁾」とした。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象と方法

調査対象は、A県内2校の中学生145名とした。調査は、無記名自記式の質問紙を用いて集合調査法により実施した。回答は個人が特定されないように、また学校関係者に見えることのないようにシール付の封筒で本人により密封されたものをその場で回収した。調査期間は2004年9月から2005年2月とした。回答は143名から得られた。(回収率98.6%)

2. 調査内容

調査内容は、性別、年齢、自己意識に関する質問項目で構成した。

自己意識については、上記の操作的定義に基づき項目を設定した。性成熟に伴う思春期の意識を測定するための妥当性と信頼性を備えた尺度がないため、本研究では質的研究から生成したサブカテゴリーをこの年代の子どもが回答しやすい質問項目として文章化し、青年心理学、発達心理学等の先行研究¹⁴⁻¹⁵⁾を参考に性成熟と自己意識に関する調査項目を作成した。このとき、性成熟と自己意識の下位概念は、「身体感覚の自己意識」「性に関する自己意識」「他者(同世代)に向かう自己意識」「他者(大人世代)に向かう自己意識」の領域を想定し、39項目を用いた。回答は、自己意識の体験の程度を4件法で求め、「なかった：0点」「たまにあった：1点」「ときどきあった：2点」「よくあった：3点」とし、得点が高いほど性成熟に伴う自己意識が広がりを持っていることを意味するよう得点化した。

3. 解析方法

統計解析は、まず、内容的妥当性を検討した上で、通過率により相対度数が90%を超える項目削除を行った¹⁶⁾。続いて、内部一貫性を高めるために同時複数項目削減相関係数法を用いてCorrected Item Total Correlation (以下CITC)を算出し項目選択を行った。次いで同時複数項目削減主成分分析法を用いて項目選択を行った。そして、性成熟に伴う自己意識の研究蓄積が少ないことから、質的研究から生成した4つの相に基づき、各相に所属する項目間の相関係数を算出し、相関が高い項目はいずれかで代表させることとした。さらに、より少ない項目で

適切に測定が可能な尺度の開発をねらいとし、項目の圧縮を試みた。各相を因子とみなし測定項目を観測変数とする1因子モデルを作成し、パス係数を参考に適切な測定項目を選択することとした。以上の結果を基礎とした二次因子モデルを指定し、検証的因子分析を行った。質問項目の内部一貫性はCronbachの α 信頼性係数で検討した¹⁶⁾。モデルの適合度指標は、Comparative Fit Index (以下、CFI)を用いた。CFIは1に近いほどモデルのデータへの適合がよいことを意味する¹⁷⁾。

解析にはSPSS11.5 J for Windowsを、モデルの検討にはAmos5.0 (最尤推定法)を用いた。統計学的に有意な確率は、両側検定で5%以下とした。

4. 倫理的配慮

学校長に研究の趣旨を説明し同意を得た。担当教員により文書と口頭で生徒に研究参加の自由と拒否の自由、プライバシーの保護についての説明を行い、同意を得られた者からのみ回答を得た。なお、本研究は岡山県立大学倫理委員会の承諾を得て実施した。

Ⅳ. 結果

1. 対象者の属性

性成熟に伴う自己意識の因子構造モデルの検討には、自己意識39項目に欠損値のない106名を分析対象とした。性別は、男性が56名(52.8%)、女性50名(47.2%)であった。年齢は、13歳が10名(9.4%)、14歳が78名(73.6%)、15歳が16名(15.1%)、不明が2名(1.9%)であった(表1)。

思春期の性成熟に伴う自

富岡美佳 佐藤ゆ

N=106

2. 性成熟に伴う自己意識の因子構造モデル

自己意識に関する39項目の回答分布を表2に示した。自己意識の広がりを見せていると判断される「ときどきあった」「よくあった」を合わせた相対度数が高い項目は、「項目16：男性あるいは女性だなど自分のことを思うことがある」「項目22：同性の仲間といえることがとても心地よい」「項目30：親が

部屋に入ってくることがいやだと思うことがある」などであった。

まず、内容的妥当性を検討し、「項目7：異性を自分と異なる性として意識する」はこの時期に全般的に特に高くなるとされている意識であり⁴⁾、個人の識別性を反映しにくいと考えられたため削除した。さらに「項目18：自分の知らない性について興味がある」は性成熟期の中学生への適切な質問項目ではないと判断し削除した。37項目の相対度数を確認したところ、偏りがある項目は認められなかった。次いで、CITCを算出したところ全ての項目は基準値0.3を上回っていた。さらに、同時複数項目削減主成分分析法に従い検討した結果、第1主成分因子負荷量はいずれも0.3以上であったため項目削除を行わなかった。

続いて、質的研究から生成した4つの相に基づき、各相に所属する項目間の相関係数を算出した。第1の相「身体感覚の自己意識」に所属する5項目のうち、「項目2：先輩・後輩・友人のからだの変化と比較して自分を意識したことがある」と「項目3：鏡をよく見る」間の相関は0.45であったため、項目2で代表させた。さらに相を因子とみなし測定項目を観測変数とする1因子モデルを作成した。5つの項目へのパス係数は0.37から0.62であり、CFIが0.79であった。最もパス係数の低い「項目6：自分の気持ちを自分自身で方向づけられるような感覚をもっている」を削除した。4項目へのパス係数は0.38から0.64であった。最もパス係数の低い「項目1：今までの子どもではない自分だなと感じたことがある」を削除した。3項目からなる1因子モデルの適合度はCFIが1.00であった。

第2の相「性に関する自己意識」に所属する12項目のうち、「項目11：性について関心があると思われることは嫌だと思う」と「項目13：自分の性に関する意識や関心は人に知られたくないと思う」間の相関は0.55であったため項目11で代表させた。「項目16：男性あるいは女性だなと自分のことを思うことがある」と「項目20：異性から好感をもたれたいと思う」間の相関は0.47であったため項目16で代表させた。「項目17：周囲の異性からの視線を感じると自分を守ろうという気持ちが生まれる」と「項目8：異性と話をする時なんとなく距離を感じる」間の相関は0.45であったため項目17で代表させた。「項目16：男性あるいは女性だなと自分の

ことを思うことがある」と「項目9：自分が男性としてあるいは女性として人からどのように思われているかをよく考える」間の相関は0.42であったため項目16で代表させた。さらに相を因子とみなし測定項目を観測変数とする1因子モデルを作成した。8項目へのパス係数は0.39から0.61であり、CFIが0.82であった。最もパス係数の低い「項目17：周囲の異性からの視線を感じると自分を守ろうという気持ちが生まれる」「項目19：自分のことがとても大切だと感じる」を削除した。6項目へのパス係数は0.37から0.61であった。最もパス係数の低い「項目10：性についての話題がでると動揺する」を削除した。5項目へのパス係数は0.37から0.66であった。最もパス係数の低い「項目11：性について関心があると思われることは嫌だと思う」を削除した。4項目からなる1因子モデルの適合度はCFIが0.99であった。

第3相「他者（同世代）に関する自己意識」に所属する8項目のうち、「項目26：男女交際にあこがれる」と「項目27：自分の顔や身体を他人と比べて気にすることがある」間の相関は0.51であったため項目26で代表させた。「項目24：異性には自分には無い能力があると思う」と「項目23：大人への思いを同性の仲間と話すことがある」間の相関は0.45であったため項目24で代表させた。6項目からなる1因子モデルのパス係数は0.64から0.69と全て有意であり、適合度はCFIが0.96であった。

第4相「他者（大人世代）に向かう自己意識」に所属する11項目のうち、「項目32：女子は父親・男子は母親がいやだと感じたことがある」と「項目33：親に反抗しすぎたと思うことがある」間の相関は0.43であったため項目32で代表させた。「項目37：周囲の人からは普通に接してほしいと思うことがある」と「項目36：自分の感情をコントロールすることや、運動をすることでいらだつことを抑えることができた」間の相関は0.42であったため項目37で代表させた。さらに相を因子とみなし測定項目を観測変数とする1因子モデルを作成した。9項目へのパス係数は0.43から0.69であった。最もパス係数の低い「項目34：親には抵抗しても無駄と思いあきらめたことがある」を削除した。8項目からなる1因子モデルの適合度はCFIが0.98であった。以上の結果を基に、「身体感覚の自己意識」「性に関する自己意識」「他者（同世代）に向かう自己意識」

表2 性成熟に伴う自己意識に関する回答分布

項 目	度 数 (%)			
	なかった	たまにあった	ときどきあった	よくあった
身体感覚の自己意識				
1 今までの子どもではない自分だと感じたことがある	37 (34.9)	33 (31.1)	26 (24.5)	10 (9.4)
2 先輩・後輩・友人のからだの変化と比較して自分を意識したことがある	50 (47.2)	27 (25.5)	21 (19.8)	8 (7.5)
3 鏡をよく見る	35 (33.0)	26 (24.5)	16 (15.1)	29 (27.4)
4 周りの人に全身を見られることに不愉快さを感じた	58 (54.7)	18 (17.0)	14 (13.2)	16 (15.1)
5 自分のからだに起こる成長の変化に戸惑うことがある	67 (63.2)	26 (24.5)	9 (8.5)	4 (3.8)
6 自分の気持ちを自分自身で方向づけられるような感覚をもっている	34 (32.1)	25 (23.6)	31 (29.2)	16 (15.1)
性に関する自己意識				
7 異性を自分と異なる性として意識する	39 (36.8)	27 (25.5)	13 (12.3)	27 (25.5)
8 異性と話をする時なんとなく距離を感じる	45 (42.5)	29 (27.4)	16 (15.1)	16 (15.1)
9 自分が男性としてあるいは女性として人からどのように思われているかをよく考える	34 (32.1)	23 (21.7)	23 (21.7)	26 (24.5)
10 性についての話題がでると動揺する	59 (55.7)	27 (25.5)	9 (8.5)	11 (10.4)
11 性について関心があると思われることは嫌だと思う	45 (42.5)	33 (31.1)	16 (15.1)	12 (11.3)
12 友達は性についての関心をもっていると思う	19 (17.9)	20 (18.9)	26 (24.5)	41 (38.7)
13 自分の性に関する意識や関心は人に知られたくないと思う	38 (35.8)	32 (30.2)	21 (19.8)	15 (14.2)
14 性に関する情報を落着いて受け止められる	25 (23.6)	30 (28.3)	22 (20.8)	29 (27.4)
15 性行動に伴う責任や、善悪などについて自分の意見をもっている	28 (26.4)	27 (25.5)	24 (22.6)	27 (25.5)
16 男性あるいは女性だなど自分のことを思うことがある	28 (26.4)	25 (23.6)	25 (23.6)	28 (26.4)
17 周囲の異性からの視線を感じると自分を守ろうという気持ちが生まれる	60 (56.6)	24 (22.6)	11 (10.4)	11 (10.4)
18 自分の知らない性について興味がある	55 (51.9)	23 (21.7)	16 (15.1)	12 (11.3)
19 自分のことがとても大切だと感じる	25 (23.6)	26 (24.5)	24 (22.6)	31 (29.2)
20 異性から好感をもたれたいと思う	32 (30.2)	26 (24.5)	22 (20.8)	26 (24.5)
他者（同世代）に向かう自己意識				
21 同性の仲間と成長が同じだと安心する	29 (27.4)	11 (10.4)	25 (23.6)	41 (38.7)
22 同性の仲間といることがとても心地よい	16 (15.1)	10 (9.4)	24 (22.6)	56 (52.8)
23 大人への思いを同性の仲間と話すことがある	44 (41.5)	22 (20.8)	19 (17.9)	21 (19.8)
24 異性には自分には無い能力があると思う	28 (26.4)	20 (18.9)	18 (17.0)	40 (37.7)
25 同性の仲間や先輩にあこがれる	25 (23.6)	26 (24.5)	25 (23.6)	30 (28.3)
26 男女交際にあこがれる	42 (39.6)	23 (21.7)	19 (17.9)	22 (20.8)
27 自分の顔や身体を他人と比べて気にすることがある	41 (38.7)	17 (16.0)	19 (17.9)	29 (27.4)
28 自由に振舞う友人にあこがれる	32 (30.2)	22 (20.8)	15 (14.2)	37 (34.9)
他者（大人世代）に向かう自己意識				
29 大人の権力で抑えようとするところがいやだと思う	21 (19.8)	17 (16.0)	18 (17.0)	50 (47.2)
30 親が部屋に入ってくることがいやだと思うことがある	28 (26.4)	18 (17.0)	13 (12.3)	47 (44.3)
31 親との共通の話題が減ったように思うことがある	58 (54.7)	24 (22.6)	11 (10.4)	13 (12.3)
32 女子は父親・男子は母親がいやだと感じたことがある	39 (36.8)	22 (20.8)	16 (15.1)	29 (27.4)
33 親に反抗しすぎたと思うことがある	37 (34.9)	21 (19.8)	18 (17.0)	30 (28.3)
34 親には抵抗しても無駄と思いあきらめたことがある	42 (39.6)	23 (21.7)	17 (16.0)	24 (22.6)
35 とくに理由はないが気持ちがいらいらすることがある	25 (23.6)	23 (21.7)	17 (16.0)	41 (38.7)
36 自分の感情をコントロールすることや、運動をすることでいらだつことを抑えることができた	26 (24.5)	12 (11.3)	34 (32.1)	34 (32.1)
37 周囲の人からは普通に接してほしいと思うことがある	32 (30.2)	20 (18.9)	29 (27.4)	25 (23.6)
38 大人が自分への配慮が無いと感じることがある	53 (50.0)	30 (28.3)	9 (8.5)	14 (13.2)
39 大人からは普通に接してほしいと思うことがある	47 (44.3)	23 (21.7)	20 (18.9)	16 (15.1)

N=106

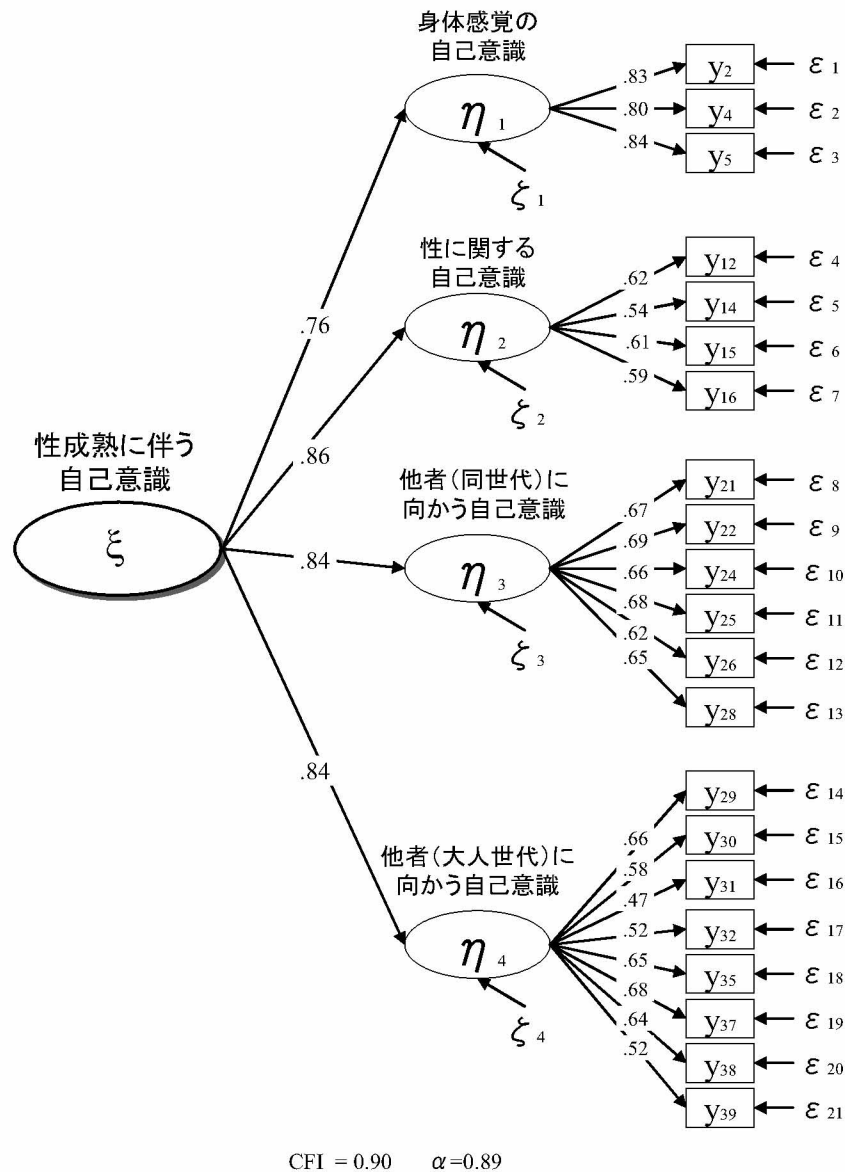


図1 性成熟に伴う自己意識に関する因子構造モデル（標準解）

N=106

「他者（大人世代）に向かう自己意識」を第一次因子、「性成熟に伴う自己意識」を第二次因子に配置した21項目からなる4因子二次因子モデルを指定し、モデルのデータへの適合度を検証的因子分析により検討した。その結果、CFIが0.90であり、パス係数はすべて統計的に有意な水準にあった（図1）。また、 α 信頼性係数は21項目で0.89であった。

V. 考察

本研究は、性教育の教育効果を測定するための尺度開発をねらいに、性成熟に伴う自己意識の構造について検討することを目的としたものであった。質的研究から導き出した「性成熟と自己意識」に関する39項目をアイテムプールし、調査を実施した。

検証的因子分析の結果、21項目で構成される4因子二次因子モデルの適合度は、統計学的に許容水準を満たした。また、これら21項目の α は高い値を示し、内部一貫性を有する質問項目であることが確認された。因子構造モデルがデータによって支持されたことは、思春期の性成熟に伴う自己意識が、「身体感覚の自己意識」「性に関する自己意識」「他者（同世代）に向かう自己意識」「他者（大人世代）に向かう自己意識」の4つの下位領域で構成されることを意味している。

他者である同世代に向けた自己意識は、先行研究で生成されたカテゴリーである＜わいら・うちの帰属感＞として仲間に帰属し成熟過程で経験される

感情を共有し、数人で交じり合いながらとりとめない話題のなかに温床を創り出している現状を反映していると解釈された。これは、徒党時代としてブロスが示した理論と同様に¹⁸⁾、性成熟に伴う思春期の仲間意識の重要性を示している。仲間といることに安心感を覚え、同世代の異性への理解を生み、同輩に憧れることにより、近未来の自分を創造し、これまでの子どもとしてではない自己を再構築していると思われる。近年いじめや不登校、自殺などが深刻な問題とされているが¹⁹⁻²⁰⁾、本研究が示すように性成熟の過程では仲間との関係が自己の意識を高めることとなり、この時期の同世代との関係性を保つ教育のあり方が必要であると思われる。

同世代に比して大人世代に向かう自己意識は、成長する身体と深まる意識が、自分がこれから向かっていく大人世代に対する反発や苛立ちとして複雑な意識のありようを表す項目により構成されることが確認された。「他者（大人世代）に向かう自己意識」は複雑な意識を表す要素で構成されたことから、大人世代は、複雑多岐にわたる自己意識のありようを理解し平板な捉えをするのではなく、多くの配慮的な見守りを行う必要性が推察された。

また、これらの他者に向かう意識と共に、自己の深化に導く意識として、「性に関する自己意識」、「身体感覚の自己意識」が下位領域として位置づけられるという構造が示された。前者は、性を内密化することや性的な価値観の形成、性自認などの項目で構成されている。特に異性意識の芽生えは、ハーロックが発達の視点から示した5段階分類と同様に、性的拮抗の時期から始まりロマンティックな恋愛の時期に向かうことが先行する質的研究からもしめされており、本研究結果からも性に関する自己意識を大きく高めていることが示されている²¹⁾。性的な自己を自覚することは、自己を愛おしい存在として自覚することでもあり、異性からの高い評価を得たいという感情の経験をしていた。中村によると自己愛は欲望の調節機能になるといわれている²²⁾。また、後者は、性徴への戸惑いと成熟へ向けられる他者からのまなざしへの不愉快さ、同輩から照らし出される自分の身体感覚などの項目で構成されている。羞恥は高度の感情に位置することからも、第二次性徴のおとずれは自己を内省する力をもたらしものと考えられる。これらの目覚める性の意識のありようをヘッセの思春期の記述をもとに梶田が示し

た、「秘密なことであるとともに、子どもであり子どもではない二重の世界という曖昧な経験世界を表している」ものと解釈される²³⁾。この繊細な意識のありようを十分理解し、性成熟に伴う複雑な心性が性の自認や価値の形成を導いていることから、これらの過程で獲得される力を十分に発揮できる環境が必要であると思われる。

本研究結果により、思春期の意識構造を理解し従来の学校教育で行われている教科での知識の導入に加え、性成熟の過程で獲得される自らの力を活用した教育法の検討を考える指標となると推察される。また、思春期の性成熟に伴う自己意識の因子構造モデルは、考案された教育法が自己意識を広げていく効果を示しているかを測定する尺度として使用し得る可能性を示唆するものであり、今後外的基準との関係における構成概念妥当性の検証や、交差妥当性の検証、ならびに更なる信頼性の検討が課題であると考えられる。

謝辞

本研究の趣旨を御理解いただきご協力くださった中学校の先生方に深く感謝いたします。また、勉強や部活動のお忙しい中、アンケート調査に御協力くださった中学生のみなさまに心から感謝を申し上げます。本研究にあたり、笑顔で支えてくださった博士後期課程の大学院生のみなさまに心から感謝をいたします。

参考文献

- 1) 田能村祐麟 (2005). 2005年調査 児童・生徒の性. 東京. 学校図書
- 2) 宮原忍 (2002). 思春期男女の性とその早熟化. 周産期医学, 32 (4) : 419-423.
- 3) R.I.エヴァンス (1981). 岡堂哲雄訳 (1981). エリクソンは語る. 新曜社.
- 4) 日本性教育協会 (2001). 「若者の性」白書. 小学館.
- 5) 木原雅子 (2006). 10代の性行動と日本社会—そしてWYSH教育の視点. ミネルヴァ書房.
- 6) 猪俣富美子 (2004). 子どもとメディアをめぐるこの一年. 子ども白書. 草土文化.
- 7) 斉藤益子, 木村好秀 (2005). 子どもたちの性. 産婦人科治療, 91 (5) : 489 - 495.
- 8) 川村和久 (2005). こどもたちのコミュニケー

ション・インターネット. 小児内科、37
(7) : 945-950.

- 9) 文部科学省 (1999). 学校における性教育の考え方、進め方. ぎょうせい.
- 10) 田能村祐麟 (1995). 性教育の考え方進め方. 学校図書.
- 11) 富岡美佳、横手芳恵 (2004). 思春期の性成熟と自己意識. 岡山県立大学大学院修士論文.
- 12) Jean Piaget (1968). 滝沢武久訳 (1999). 思考の心理学. みすず書房.
- 13) 森岡清美、塩原勉他 (1993). 新社会学辞典. 有斐閣.
- 14) 斉藤誠一 (1996). 青年期の人間関係. 培風館.
- 15) 吉田辰雄 (1990). 児童期・青年期の心理と生活. 日本文化科学社.
- 16) 服部環 (1991). テストの内部一貫性を大きくするための項目選択技法. 教育心理学研究、39 (2) : 195-203.
- 17) 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 [入門編]. 朝倉書店.
- 18) 横井公一、前田志嘉代他 (2003). 児童青年精神医学の現在. ミネルヴァ書房.
- 19) 清水凡生 (2001). 総合思春期学. 診断と治療社.
- 20) 日本子ども家庭総合相談所 (2004). 日本子ども資料年鑑. 中央出版.
- 21) 中村留貴子 (1992). 第6部精神分析 (氏原寛. 心理臨床大辞典. 1001-1003東京都. 倍風館
- 22) 落合良行 (1993). 青年の心理学. 有斐閣
- 23) 梶田穎一 (1993). 自己意識の発達心理学. 金子書房.

Factor Structure of Self-Consciousness of the Adolescent Sexual Maturation Process in Japan

MIKA TOMIOKA, YOSHIE YOKOTE*

Faculty of Nursing, Kansai University of Social Welfare, 380-3 Shinden, Ako-shi, Hyogo 678-0255, Japan

**Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University, 111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan*

Abstract

The purpose of the study was to examine the factor structure of self-consciousness of the adolescent sexual maturation process in Japan. Study subjects were 145 junior high-school students (13-15 years old). Of 143 respondents (correct rate 98.6%), 106 who had no missing values were analyzed. Exploratory factor analysis identified a four factor structure including “self-consciousness of somatoesthesia,” “self-consciousness of sexuality,” “self-consciousness facing others (peers),” and “self-consciousness facing others (their parents’ generation).” Factor analysis supported the four-factor structure. These findings confirmed the findings reported in previous studies on self-consciousness of sexual maturation and indicated the possibility of developing a scale for measuring self-consciousness of sexual maturation.

Keywords : adolescence, sexual maturation, self-consciousness, confirmatory factor analysis, construct validity